

## 日欧交渉史資料拾遺

——『珍籍展覧会目録』と『開國小史』——

竹 居 明 男

### はじめに

日欧交渉史の分野に関しては、私は全くの門外漢であるが、近時架蔵に帰した古書の中に、従来はあまり注意されていないように見られる同分野関係の書二点がある。この二点の概要を紹介したが、これまで調べ得た事柄をも併せ記し、もって杉井六郎先生御退職記念の小論に代えさせていただきたいと思う。

#### 一 丸善株式会社編『珍籍展覧会目録』（昭和七年刊）

本書は、昭和七年（一九三二年）十一月十七日より二十四日まで、丸善株式会社東京本社にて、また翌八年正月十四日より二十日まで同大阪支店において、「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展覧会」と銘打って開催された展覧会の目録である。同展の趣旨について本書巻頭に次のような一文がある。

天正年間九州の大夫、大村、有馬三侯により欧州に派遣されたる四使節がイスパニア、ポルトガル、ローマ等々西欧諸地に遺しました印象は俄然極東ニッポンの存在を現実的に強調せるもので、マルコ・ポロにより僅にフェアリーランドの如く知られられたものが一躍して爾來布教と文化東漸に拍車を加へる機縁を胎したときへ言はれて居ります。今回その渡欧後三百五十年に際し四使節の偉蹟を記念し過去数年間弊社が鋭意蒐集致しました関係貴重書数百点と東洋古地図数十点を上記期間陳列し一般の御清鑑に供へ、併せて御希望により御売却に応じます。それ等は主として南蛮人渡來前後の事情や切支丹與廢の百年間を究めるに特にバイタルなクラシックのコレクションで再獲を難する奇書珍籍も多く、且つは日欧関係の進展を遙か数世紀に遡り從來の徳川時代の史記を覆へず重要資料も決して乏しくないと思考致します。就中偶々奇蹟的に弊社の所有に帰しました切支丹文獻の代表「ギヤ・ド・ペカドル」上巻を御一覽に入れることの出来ますのは欣懐に堪へない所で、同書は別項村岡先生の御解説の如く現時世界にユニックの称ある最大稀覯で御座います。就ては吾が書籍界創めてのこの催しに御賛同を得て汎ねく御一察の栄を給りますすれば幸甚此上もなき次第と存じます。

この文章の中にすでに触れられているが、丸善は昭和六年に、それまでは日本国内に一部も存在しなかつた耶蘇会版『ギヤ・ド・ペカドル』（邦訳本）上巻をイタリアの古書店から入手し、是非とも好事家の目を楽せませたく、密かにその機会をねらっていたというのが真相であつたらしい（『丸善百年史』下巻、昭和五十六年）。そこで、翌七年がいわゆる天正遣欧使節の長崎出發（一五八二年）から数えて丁度三五〇年目に相当する折をみて、丸善がこれまで収集してきた日本関係洋書一七八点と、東アジアの古地図四五点を出陳したのであつた。しかも姉崎正治・浜田耕作・幸田成友・太田正雄（木下柰太郎）・佐伯好郎らの諸大家たちも、この催しを耳にして、それぞれの所蔵にかかゝる書籍・写真等を出品。「専門家を始め各方面から我が国の文化史上空前絶後の試みであるとして多大の絶賛を博した」展覧会であつた（前掲『丸善百年史』下巻）。

しかしながら、この展覧会について——関係者はともかく——述べたものは意外に少なく、管見の限りでは吉田小五郎氏の「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展を見て」と題する小文（『学鑑』昭和七年十二月号）、及び石田



図1 珍籍展覧會目錄(表紙)

幹之助氏の「キサトウスの『日本諸島実記』と西洋刊行最古の日本地図」(『ビブリア』第三二号及び三六号、昭和四十、四十二年)の「正誤及び補遺」に触れてあるもの、の二点にとどまる。かつ同展の出品目録として製作された表題書も、あまり識者の注意にのぼらないので、ここに紹介を試みる所以である。

さて本書は、縦二二センチ、横一六・五センチの大きさで本文は一四三頁。これに随所に挿入されたアート紙の写真頁が計三四頁にのぼる。表紙は前記『ぎや・ど・ぺかどる』(現在は天理図書館所蔵で、重要文化財指定)のデザインを流用して新村出氏の揮毫になる題字を嵌めてある(図1)。中扉にはほぼ同じデザインながら英語で題辭を記し、その裏に数条からなる例言を記す。奥付(筆者架蔵本は脱落。いま同志社大学図書館所蔵本による)によれば昭和七年十一月二十一日発行で、「実費金壹円」にて頒布されたいらしい。

さて本文(横書)は先にも触れた丸善出品の洋書一七八点の書籍を対象としたもので、一々につきタイトルページを載せ、これが無いものはコロン全文を記し、かつ本の大きさ、巻数、丁数または頁数、発行年、発行地を加え、さらに日本文による解説を付す。図版も極めて豊富に挿入されている。

書目の配列は、本書例言に

記載順は最初の「ぎや・ど・ぺかどる」(B)「天正遣欧使節記」(A)「伊達遣使録」を除く他は取材項目の年代順に依り、又全般的事项を扱へる通史類は其の刊年の順位に従ひ配列したり。(傍線(A)(B)は筆者)

とある通りで、(A) (B) 二種の配列が混在するために、一見したところやや不分明なところがある。以下、私見を交えて改めてその内容を整理しておこう。

まず冒頭に「天正遣欧使節につき」と題する幸田成友氏の小文があり、次に書目番号(1)として『ぎゃ・ど・べかどる』を六枚の写真と共に掲げ、村岡典嗣氏による同書解説を付す。ついで天正遣欧使節に関するもの一〇点(2) (11)、伊達政宗の遣使に関するもの四点(12) (13) (14) (15) が続き、以下は右例言の傍線部(A) (B) 混在の部に移る。

まず(A)に属するものとしては

ザビエル関係 二三点(17) (18) (19)

一五四四～六〇年 五点(40) (41) (42) (43) (44)

一五七九～八一年 五点(46) (47) (48) (49) (50)

一五八二～八四年 四点(51) (52) (53) (54)

一五八六～九〇年 三点(55) (56) (57)

一五八九～九六年 一〇点(61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70)

二十六聖人殉教関係 九点(71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79)

一五九九～一六〇二年 四点(80) (81) (82) (83)

一六〇六～一五年 八点(84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91)

一六一五～二一年 五点(92) (93) (94) (95) (96)

一六一七～二四年 一点(97)

ピントー関係 五点(107) (108) (109) (110) (111)

一六二二年の大殉教関係 一〇点(114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123)

一六二四年 五点(124) (125) (126) (127) (128)

一六二五～三三年 二二点(133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147) (148) (149) (150) (151) (152)

一六三二～三七年 六点(153) (154) (155) (156) (157) (158)

一六四三年 二点(163~164)

があげられ、これ以外の(16)(45)(58)~(60)(84)~(90)(99)(103)(112)(113)(124)(125)(131)(132)(161)(162)(163)~(178)計三六点は(B)の分類に属する。例えば、

(84)はフェルナン・ゲレイロ著『耶蘇布教史』第一巻西班牙訳本、(112)はニコラス・トリゴ編『日本切支丹迫害史』、

(132)はソリエー著『日本教会史』第一巻のごときである。このように、本目録に掲載された書目の大部分が、鎖国前後までの、日欧交渉史上の初期百年間に関するもので占められていることは、内容上の一特色をなす点である。

いったい、本書が収載しているような日本関係の西洋刊行書の目録・解題の類書としては、古くはパジェス(一八五九年刊)、コルディエ(一九二二年刊)、ウェンクステルン(第一巻、一八九五年、第二巻、一九〇七年)、ナホッド(一九二八年刊)による著名なものがあり、キリスト教関係に限ってはバツケル(一八五三~六一年刊)、ゾンマアフォゲル(一八九〇~一九一〇年刊)、シトライト(一九二八~三〇年刊)のすぐれた目録・書誌が存する(石田幹之助「日本関係西籍目録に就いて」、『読書展望』昭和二十二年九月号所収)。

当然ながら本目録の解説も、それら先行の業績に拠るところ多く、現に前記例言に「引用書誌の主要なるもの」一五点を列記し、なかでもコルディエ、シトライト、ゾンマアフォゲルの三著に負うところ極めて多いことを断っているのである。

しかしながら本目録の解説は、一読、実に簡にして要を得ており、とくに書誌的事項については前記先行目録・解題書との異同を一々注記し、その点、コルディエまたはシトライトの著に記載の無いもの、あるいは未見と注しているものが、私の数えたところ二五点も本目録に含まれていることは、それだけでも注目に値するものがある。また、解説は掲載書の著者、編者、訳者の簡潔な伝記にも及んでおり、実に行届いたものがある(図2)。

そして何よりも、この解説が日本文であること。このことは浩瀚な先行諸文献がすべて西欧語によるものであるこ



め、その第四冊が『日本関係西籍解題』（石田幹之助担当）にあてられていた。しかしながら諸般の事情からついにこれが未刊に終わっている今日（前掲『国史文献解説』の第二部に、これが刊行済みかのように記すのは誤り）、本目録の資料的価値はさらに高まるものと言えよう。本目録の例言にもあったように、展覧会したいが即売会を兼ねており、今日ではこのままのままとまった姿で見られない点も、この際忘れられてはならないであろう。

なお本目録より少し遅れて、同様な方法で解説を加えた諸家出品書籍及び東亜古地図目録、そして人名・書名索引を含む付録が刊行されており（『丸善百年史』下巻）、これがあつて本目録は完璧なものとなるが、残念ながらこちらの方は筆者未見である。

ちなみに架蔵の本目録の表紙裏には「荒木伊兵衛様 山崎民雄」なる墨書がある。後者「山崎民雄」は未詳。あるいは本目録編纂に関つた人物の一人か。前者の荒木伊兵衛は、『文明移入に関する古書展覧会目録』（大正十四年）、『日本英語学書志』（昭和六年、同五十七年復刻）を編んだ大阪の古書店主荒木伊兵衛（幸太郎）と同一人物だと思われる。

## 二 恩田栄次郎著『開国小史』（明治三十二年刊）

本書は、幕末の嘉永元年（一八五三）及び翌安政元年（一八五四）におけるアメリカ合衆国ペリー提督来日の模様を主題とする。

この主題に関しては史料もかなり豊富で、専著・論文ともきわめて多いが、管見の限りでは本書を引用したり、参考文献目録に挙示したものはない。ペリー来日のみならず、広く日欧交渉史関係の文献目録として権威のある松田毅



図3 開國小史（中扉）

一編『日欧交渉史文献目録』（昭和四十年）にも載録なく、ようやくその改訂版京都外国語大学付属図書館編『対外交渉史文献目録・近世篇』（昭和五十二年）に載録をみた。筆者が少し調べたところでは国立国会図書館には所蔵し、同館刊行の『明治期刊行図書目録』第一卷（昭和四十六年）には登載されている。かれこれ思うに、先の改訂版目録は国会図書館本によって収載されたものではなからうか。かくて本書も

また稀覯本に属するかと思考するが、単に珍しいだけではなく、その内容にも興味深いものがある。

架蔵本は残念ながら原装釘を保持していないが、さるベテランの古書店主に見ていただいたところ、昭和も早い時期の本格的な製本が施されているとのことである。

本書はいわゆる菊判ないしA5版洋装の体裁で、本文は四五一頁。末尾の奥付によれば明治三十二年六月二日発行、定価金二円。発行所は横浜市内の信陽堂である。著者恩田栄次郎については、奥付に「横浜市羽衣町二丁目三十八番地寄留、長野県士族」と記載がある以外は未詳である。

中扉に（図3）

故勝海舟伯題辭

中江篤介君序



## 林昇君序

とあるように、巻頭に海舟の揮毫になる題辭（海舟は明治三十二年一月十九日死去）、次に中江兆民及び林昇（後述する林復斎煥の子）の序があり、つづいて林大学頭（復斎）とペリー提督の肖像画が写真版で掲げられ、さらに折込で嘉永七年（安政元年）二月十日横浜における「日本人亜墨利駕人応接之図」が載せられている。このうち明治三十二年四月付の「中江兆民撰」の序文は岩波書店版の『中江兆民全集』には見当たらないので、次に掲げておくことにしよう。

今ヲ距ル一四十有余年浦賀埠頭米國艦隊ノ警砲一発シテ鎖國ノ夢為メニ攪破セラレシ時ヨリ厥後諸藩ノ人士或ハ尊攘開幕ノ議ヲ騰ケ或ハ佐幕開國ノ論ヲ唱ヘ桜田ノ変ヤ十津川ノ乱ヤ曰ク七郷ノ出走曰ク伏見ノ戦争ヨリ相踵テ維新開國ノ大業ヲ成就スルニ至レリ凡ソ此間内外ノ事情後世史家ノ材料ニ入ル可キ者極メテ夥シ此書幕府ノ儒臣林大学頭ノ遺稿ニ係ル米使応接録ニ基キ旁ヲ著者力數年間専心留意蒐集シタル材料ヲ収メ専ラ写真ヲ旨トシ小大漏ス一無シ惟フニ世間此種ノ書無キニ非ラスト雖モ多クハ是非ヲ顛倒シ紫朱ヲ混淆シ中興ノ歴史ト云ハシヨリハ寧ロ稗官ノ想像ト云ハン而已是書ノ如キ者真ニ磧中ノ昆吾ト謂フ可シ予繙読一過覽ヘス案ヲ拍ツ乃チ聊カ所思ヲ記シテ之ヲ卷首ニ辯スト云フ

さて本書には目次に類するものが無く、繙読にいささかの不便を感じるが、明治三十二年五月付の著者による凡例を手がかりに内容把握を試みてみよう。凡例全文は左記のごとくである。（便宜、記号㉔㉕㉖を付す）

- 一本書編纂ノ目的ハ普ク世人ヲシテ當時ノ状況ヲ知ラシメンカ為メナレハ苟モ事実ヲ知ルノ材料ト思惟スルモノハ細大漏サス之ヲ記載セリ……………㉔
- 一本書ハ林大学頭ノ遺稿ナル応接録ヲ以テ基礎ト為セシト雖モ該応接録ハ嘉永七年ノ分ニシテ彼理渡来ノ第二回ノ時ナリシカ其第一回ノ分ハ材料多ク小川茂周氏ヨリ得タルモノナリ……………㉕
- 一本書中林氏遺稿ノ如キハ一言一句ト雖モ敢テ妄リニ改竄セス是レ其真意ヲ失ハン一ヲ恐レテナリ然リト雖モ編纂ノ順序ヲ変シタル処ナキニアラス則チ書簡或ハ条約等ノ如キ遺稿ニ之ヲ付録ト為スト雖モ本書ニハ見解ニ便ナルヲ以テ適當ノ処ニ挿入シタルハナリ……………㉖

一余固ト浅学短才頗ル文辞ヲ能クセス故ヲ以テ行文渋滞章句相前後シ所説意中ヲ尽サ、ル所ナキニアラス読者幸ニ之レヲ諒セヨ  
……①

この例言から知られるように(⑧⑨)、本書の一つの柱はアメリカ応接係林大学頭煇の『応接録』(『墨夷応接録』と  
も。安政元年正月十九日より同年六月二日に至る、神奈川ならびに下田における米国使節応接の記録)を収録したも  
ので、一三八頁から末尾四五一頁まで、本書の約七〇パーセントを占める。この記録は安政元年度の交渉についての  
基本史料としてよく知られており、通常は『大日本古文書・幕末外交文書』附録之一(日記部分)及び第四〇七巻  
に分載(書簡・条約等の文書類)のものが用いられる。したがって特に新史料であるわけではないが、同応接録の翻  
刻としては右文書附録之一刊行の大正二年(一九一三)をさかのぼること一四年前であること、また『外交文書』本  
は「明治九年、林昇氏所蔵ノ原本ヲ騰写」した「内閣所蔵本ニ拠」ったものであり(五二八頁)、『開国小史』所載  
本は原本に拠った可能性もある。この点、今後の対照比較を綿密に行なう必要がある。

次に本文最初にもどると、第一頁目に「外国船渡来之沿革」と題した記述があり、一応九三頁半ばまでこれが続く  
ものとみられる。元和二年、宝暦四年、文化八年、文化十二年、天保八年、……以下安政五年六月横浜開港までの比  
較的簡潔な年表風記事(一三頁半ばまで)、嘉永六年六月来航時のアメリカ船及び使節、また日本側応接係役人の概  
要(二三頁半ばすぎまで)、六月九日～十二日までのごく簡単な記述(二四頁半ばまで)、そして嘉永六年六月九日、  
安政四年十月二十六日、同年十一月六日の書簡、対話録など(九三頁半ばまで)から成る。このあたりは著者恩田栄  
次郎の、収集資料を交えた執筆部分かと推測されるが、若干の資料はやはり『幕末外交文書』収録史料中に対応する  
ものがあり、かつ細部に小異を有する。あまり多くは望めないものの、なお精細な検討を要するところである。

さて例言⑩に示唆があるが、今日の時点でむしろ最も興味をそそるのが、以上の残り(九三頁半ば～一三七頁)に

掲載されている「四十年前の日本」と題する一篇の談話筆記であろう。まずは、この談話筆記についての著者恩田の記述をみてみることにしよう。

左に記載する一篇は読者諸氏の参考に供せん爲め編者か特に小川茂周氏の談話を筆記したるものにして篇末の問答は著者と小川氏の問答なり

氏は齡耳順を踰ゆる温厚篤実の一律翁にして現時神奈川県三浦郡豊嶋村公郷に住し世を避け花鳥風月を友とす氏か同村の名主兼水主差配役として一部警衛の任に当りしは則ち本巻の主眼たる米国公使ペルリ浦賀入港の際なりし爾後氏は区長となり郡長となり明治三十一年四月迄職を奉せし人なり故に其の談話せられたる事項は皆な其実歴に關るを以て當時の状を窮知するに裨益ある尠少にあらずと信す

このように談話者の立場・経歴、そして談話の意義を簡潔かつ適切に述べたあと、談話内容を記す。以下、必らずしも記述がその都度切れているわけではないが、六文字下げの、いわゆる「小見出し」に相当するものを列挙しておくことにしよう。

開港當時の実況／房総四家の警固／漁船を以て軍艦と闘はんとす／風あれば旗を巻く／大砲は百匁筒／八陣の備  
／司令官（藩士）皆船に酔ふ／双眼鏡にて船を覗はるゝに窮す／陣鐘陣太鼓／祝砲に驚て仏壇を背負ひ出す／開  
港當時の□状／珍しかりしは姿見鏡／紙に捻りしものあり／蒸氣器戒ベ子椅子／ペルリ帰国／手桶を縛るは困難  
なりと／こは大変切支丹なり／篩の毛三本／浦賀の波止場にて焼棄したり／山の絶頂には物見馬／槍の鞘を払ひ  
し／（以下、著者と小川との問答部分）

周知のように嘉永六年六月ならびに安政元年正月～六月の二度にわたるペリー艦隊来航時についての日米両側の、かつ公私それぞれの記録類は決して少なしとしない。しかし、嘉永六年度の日本側私的記録になると、その数はずつと少なくなるのではあるまいか。二度にわたる米側記録の代表としてはホークス編『ペルリ提督日本遠征記』、ウイ

リアムズ著『ペリー日本遠征随行記』、ペリーじしんの『日本遠征日記』があり、これに匹敵する、まとまった日本側記録は無い。これを日本人側の私的な記録に限れば、昭和七年公刊の『亜墨理駕船渡来日記』があるが、これは安政元年度のものである。

嘉永六年度（一応、ペリー一行滞在時の六月三日～十三日に関するもの）の関係資料としては、「米使ペリリ初テ渡来浦賀栗浜ニ於テ国書進呈一件」の表題のもとに『幕末外交史料集成』第二卷三八一頁以下にまとめられたものがよく利用され、中に応接掛香山栄左衛門以下数人の浦賀付与力からの聞書収める。このほか管見に入ったものとして筆者未詳『浦賀日記』（『野史台維新史料叢書』第九卷所収）、『神奈川県史・資料編』第十巻収録の諸史料（とくに史料番号一九一、二）、吉野真保編『幕末明治年間録』及び藤川整斎自筆稿本『嘉永雜記』（影印本あり）所収の史料ぐらゐであり、あとは未刊史料を探るほかない（『国書総目録』参照）。

こうした中であつて、四十年前を回想した談話であり、かつ前後の脈絡をやや欠いた断片的なものではあるが、小川の回想録は最初のペリー一行との接触の模様を生々と伝えた、得がたい資料と思われるのである。前記アメリカ側の諸記録に、その名を見出せないものの、小川は艦隊のいずれかに乗船していたことも貴重である（例えば、ウィリアムズの『随行記』西曆一八五三年七月十三日、十四日、十六日条参照）。

具体的な回想の内容は紙幅の関係で委細をあげ得ないが、ペリー一行応接用の椅子として、付近の寺の曲象を修繕して用いたこと（前記『随行記』七月十三日条参照）、米軍艦監視の日本側小舟にては、双眼鏡で覗かれる故に服装を正し、かつ姿勢を崩さぬよう命令が出て、実に難儀したこと、祝砲に驚いて付近の住民たちが一斉に逃げ出したこと、乗艦したときに、全身が映る姿見鏡に驚き、またローソクをもらつて来たこと、米軍艦から捨てられた葡萄酒や麦酒の空ビン処理を担当したこと、ペリー一行よりの種々の贈物は、一行出帆の翌日に浦賀港にて焼却してしまつた

こと、等々興味ある事実を伝える。

もとより、この種の断片的な事実をいくら積み重ねたとて、さしたる意味は無いとする御意見もあろうが、今さし、あたっては、ドキュメントの一種としての貴重な見聞を含む本書の意義を卒直に評価したいと考える。大方の識者の御示教を得て、さらに探究を続けていく所存である。

〔付記〕 小論を執筆するにあたり、杉井六郎教授をはじめ、服部純一人文学研究所事務長、また同志社大学図書館閲覧課の皆様、さらに古書肆尚学堂書店主には大変御世話になりました。末筆ながら感謝の意を表したいと思います。

(たけい あきお・同志社大学文学部助教授)